

第10回 愛と義のまち米沢エッセイコンテスト受賞作品

金賞

「車窓から見えた虹色の風景」 宮崎県 塚野 安枝さん

もうすぐ百歳を迎える祖母を祝うため、高齢の母と十ヵ月の娘と共に島根県に向かった。一時間半の高速バスを乗り継ぎ、新幹線のホームに急いだ。

到着した車内を見て、啞然とした。指定席を予約しなかったことをすぐさま悔やんだ。混雑した車両は乗車率120%、五月の大型連休中だった。次の大きな駅に到着するまでの辛抱、と自由席車両の通路で、母と二人両足に力を入れた。しばらくすると、抱っこひもで寝ていた娘が居心地の悪さからか、ぐずり始めた。この車内で娘が大泣きしたら、と考ただけで、背中に冷や汗が流れた。娘の表情から、風船が今にも割れそうな危うさを感じ、目を閉じ、唇をかみしめ、「その時」に備えた。すると、肩をトントンとたたき心配を感じた。振り返ると、一人の男性が五列ほど後方を指さしている。その方向に視線を移すと、一人の若い女性が座席の上から恥ずかしそうに顔をのぞかしていた。私と視線が合うと、女性は自分の席を指さし「うんうん」と頷いている。女性のしぐさから、席を譲ってくれるものだと思い、近づいた。すると、彼女は何も言わず、席を立った。私は「すみません、いいんですか」と尋ねると、彼女はささやくような声で「ダイジョブ、ダイジョブ」とつぶやいた。私は「ありがとうございます」と頭を下げ、好意に甘えた。「アカチャン、カワイイネ」と娘にいろんな表情を見せてあやしてくれ、娘はすっかり上機嫌。

来日して半年。ベトナムからの技術研修生だと教えてくれた。毎日工場で立ち仕事をしているから、立つのに慣れている、とまだおぼつかない日本語で、一生懸命伝えてくれた。降りる駅に到着すると「バイバイ」と笑顔で去っていった。

譲ってくれた窓側の席。家族と別れ、祖国を離れてきた彼女は、この窓からどんな景色を見たかったのだろうか。思いを寄せてみると、彼女の心のぬくもりが伝わってきた。彼女のおかげで、車窓からの景色が虹色に彩られて見えた。

銀賞

「愛と笑顔と幸せと」 鹿児島県 中原 愛水さん

「山田さんから贈り物だわ。」

宅配の人から大きな包みを受け取り、「ありがたいね。」と母が笑った。箱いっぱいにはサツマイモと野菜が入っていた。山田さんは父が転勤した島で出会った、地域の方だ。父は本土へ再び転勤となったが、今でも定期的に自分の畑で作った作物を送ってくれる。私はどうしてこんなに親切にいろんなものを送ってくれるのか不思議だった。

ある日、大学病院に母と知り合いの見舞いに行った。

「あっ山田さんだわ。」

その声に気付いた山田さんが振り返った。二人は思わぬ再開に声を弾ませ、楽しそうだった。二人がひとしきり会話をし終えたタイミングで、

「娘です。お芋も野菜もおいしかったです。家族みんなで山田さんの優しさに感動しています。」と自己紹介とお礼を伝えた。すると、山田さんは、

「どういたしまして。中原さん家族がおいしく食べている姿を想像したら、幸せな気持ちになれるわ。私たち家族もあなたのお母さんの優しさに感服よ。」

と言った。母は、「とんでもないわ!」と笑った。山田さんは、

「前、本土の病院に入院中の父が急変した時、船場から病院までどうやって行くのが最短かお母さんに聞いたら、私が送るって言って、送迎してくれたのよ。この間も私たち家族5人分のマスクを送ってくれたし。」

と母の知らない一面を教えてくれた。

帰りの車の中で、母に「どうしてあんな風に親切にできるの?」と思わず聞いた。母は、

「別に親切だなんて思ってないわ。相手が幸せになるかなって思うことをしてるだけよ。」とほほ笑んだ。

母と山田さんの2人の親切のやり取りを見て思った。

相手に対して愛があり、相手を笑顔にしたい、幸せにしたい、という思いで接することが自然とできている。そして、それが結果として親切という形になっているのだ。

私も、周りの人を幸せにするためにできることを自然とできる人になろうと母の隣で密かに誓った。

銀賞

「会釈の生む人との繋がり」 岩手県 畠山 大輝さん

僕は小学三年生の頃、盛岡市から東北地方の小さな町に引っ越した。その町には小三の僕から見ても少し驚きの習慣があった。それは横断歩道で道を譲ってくれた車の運転士さんに、渡り終えたら振り返って会釈をする、というものだ。その町では、幼稚園児から大人まで全員が道を譲ってくれたことに対する感謝を忘れない。盛岡で生活してきた僕にとって、赤の他人に会釈をすることにはなじみがなかったし、勇気の要る行動だと思った。しかし、周りの友達も皆、笑顔で会釈しているので僕もおそるおそるやってみると、運転士さんと繋がり生まれるようで、ホッコリとした気持ちになった。運転士さんの中にはニコリとほほえみ返して下さる方もいる。たったこれだけの行動で、お互い笑顔になれることを実感した時僕は、田舎ならではの温かさを深く感じた。温かさ、というのはそれだけではない。近所の方々が僕を孫のようにかわいがって下さったり、料理をおすそ分けして下さいることは毎日のようにある。通学中も「気を付けて行ってらっしゃいね、僕。」と声をかけられ、立ち止まって話をするこゝもしばしばあった……。

日本の言葉で、周辺住民どうしの助け合いのことを「結」というそうだ。まさにそのような密な繋がりを体感できた田舎での生活は僕にとってかけがえのない時間となった。

あれから三年、僕は再び盛岡に戻った。盛岡では、おすそ分けや通学中に話しかけられる、といったことはほとんど無くなった。しかし、僕は「運転士さんへの会釈」はいまだに続けている。無視されることもあるが、お互い笑顔になった時は嬉しいものだ。会釈を通じて「結」とまではいかなくても、良い人間関係を築く第一歩となると思う。心温かい大人になるためにも、僕はこれからも「会釈」を続けていく。

銀賞

「お人好し」 北海道 堀山 有里子さん

「お人好し」

この形容は、父の為にあるとって間違いない。

私の記憶内、隅から隅にある限り、父は心底困ってる人を見ると絶対放っては置けない人だった。加えて、目の前の人を必ず信じて、とにかく行動してしまう人だった。それが母をはじめ、私たち家族の悩みであったことも多々ある。なぜなら、世の中、そんな真っ直ぐな父に対して誠実な人ばかりでは…残念ながら…なかったからだ。そんな時でも母は困り顔ながらも、どこかそんな父を誇らしげに思っている節があった。いつも応援した。でも、私は知っている。

ある時などは、母が実家に帰り、腹巻きにお金を巻きつけて帰ってきたことを。

米や野菜をしこたま背負って帰ってきたことを。

困りながらも、どんな時も母は父の絶大な理解者だった。「夫婦」とは不思議なものだと子供心に思った。

数年前、そんな父が亡くなった。定年退職して二十年近く経っているし、知人友人元同僚、皆様一様に高齢化している為、わざわざお知らせするのも躊躇われた。結果、近親者だけで済まそうと、考えていた私達。

それが何処をどう瞬時に広まったのか、びっくりする程、沢山の方々が雨の中、足を運んでくださった。なかには男泣きに泣かれるかたがたもあり。傘をさせずにカッパを着ての杖や車椅子の姿もあった。

父が生きてきた人生の、かけがえのない「財産」を目の当たりにしたような気持ちだった。普段はあまり感情の起伏をみせない兄までもが涙ぐみ「親父の底力みせてもろたな」と、会場に入りきれない人への対応に涙目で追われていた。

時は流れ、二年経った。

父の三回忌法要を無事に済ませ、寺からの帰途、父との思い出の喫茶店に寄った私達家族の元に一人のご老人が駆け寄って来られた。母とは面識あるらしく、生前、父が懇意にしていた取引先のかたであったそうだ。父の葬儀には、入院中であった為出られず残念でした、と母の両手を取り丁寧な悔やみの言葉をくださった。丁度、帰られるところだったらしく、程無く別れを告げられた。父との思い出の店で父の思い出の人にぼったり会えたのも偶然のようで、偶然には思えない嬉しい出来事だった。父の思い出話に花を咲かせて、さあ帰ろうか…と、会計に向かった兄が母の元に飛んできた。

先程の老紳士が全て会計を済ませてくださっていたそうだ。

父の体は天に召されているが、まだ皆さんの心の中ではまだ、ちゃんと父は生きさせていただいているのだ、とその有り難さに胸が締め付けられる思いがした。そんな父の娘として、私も目の前の事、目の前の人に常に誠実であろうと日々思う。亡くなってなお、父が私に教えてくれることは、数限りない。

どんなに貧しても、いつも父を信じ、どこか父を誇らしげにすらしていたあの頃の母と同じ年代となり、当時の母の心中も少しずつわかってきた気がする。

「人と人の繋がり」の尊さを、その不器用で真っ直ぐな生き方で教えてくれた父を形容すると…。やはり愛すべき「お人好し」に行き着く。

銅賞

「懐が深い臨時バス」 神奈川県 宗近 忠さん

「バスが来ない。このままでは電車に乗り遅れる」時刻表の時間が過ぎても路線バスは来ていない。諸橋近代美術館前のバスで猪苗代駅行きのバスを待っていると、同じバスを待つ人たちの話し声が聞こえてきた。

天気が良くて紅葉は見ごろを迎えた日曜日の午後。帰路に就くクルマで道路も混み始めていた。やっと来たバスも一つ前の五色沼からの観光客で満員。乗客を乗せることが出来ずに行ってしまった。「困った。電車には間に合わないな。ダメだ・・・」バスを待つ20人余りは少し騒めき、あきらめのため息が漏れた。私も予定していた時刻のJR磐越西線を諦め、乗り換える新幹線をネットで調べ始めた。ふと気づくと路線バスの制服を着た人がスマホで話をしながら近づいてきた。「車庫に戻るバスがあるので、猪苗代駅行きの臨時バスとします」バスを待つ人たちに声をかけました。

程なくして空のバスが到着し20人余りを乗せると直ぐに出発。「皆さん、猪苗代駅でよろしいでしょうか・・・何時の電車ですか？」運転手はマイクを使って乗客に尋ねる。

「14時41分です・・・」電車は一時間に一本で逃すと一時間後だ。「大丈夫、間に合わせます。近道を行います」腕時計を確認すると、運転に集中していた。色々な規則がマニュアル化され、決められたこと以外はやらない。保身も含め最近では余計なことはやってはいけない時代になってきている。ところが車庫に戻るバスを臨時バスとし、20人余りの乗客が一本電車に乗り遅れるだけなのに、臨機応変に対応してくれたのだろう。有難かった。何かあったら責任を負うリスクを背負ってまでも利用客のため動いてくれた。その血の通ったプロ意識と心意気に胸が熱くなった。

猪苗代駅には14時35分に着き、余裕で電車に乗れた。「本当に有難うございます」私を含め乗客皆が心からお礼を言ってバスを下車した。今でもあの時の体験を思い出すと、心がほっこりします。

銅賞

『おしょうしな』の思い出 石川県 上農 多慶美さん

雪だ。もう四月だというのに。

米沢での短大の寮生活を始めたばかりの私。買い物を終えて、大通りのデパートから出たとたん雪。生まれ育った名取とはちがう。

歩き始めると、前をおばあちゃんが行く。両手に買い物袋で、重そうだ。<荷物を持ちましょうか？って言おうかな？でも、断われたら嫌だな・・・>

その頃の私は、いつもこうだった。この「お手伝いしましょうか」が言えない。断われた時の所在のなさを思うと、気持ちが萎えた。結果的にスルー。そのあと、手伝えばよかったのに、との後悔がくる・・・。

でも。このまま、やっぱり追い越そう。そう思った時、おばあちゃんが立ち止まった。そして大きくふーっと、息を吐いた。

そのタイミングで、「お手伝いしましょうか」が言えた。

おばあちゃんの荷物をひとつ持った。一緒に歩いたのは、ほんの少しの間。無言で歩いた。別れる時に、おばあちゃんは私の手を取って、「おしょうしな」と言った。

「おしょうしな」は知っていた。ありがたいの意味の米沢弁だ。寮の先輩が、このお菓子「おしょうしな」を食べさせてくれて、ありがたいの意味であることを教えてくれたのだ。

でも、地元の人の本物の「おしょうしな」を聞いたのは、初めてだった。何やらほっこりと、あたたかいものが胸に残った。

あれから、もう四十年以上が過ぎた。あの雪の夜以降は、自分の羞恥心より相手のことを考える「お手伝いしましょうか」が言えるようになった。

そして今でも、雪が降ると、おしょうしなの、やさしくあたたかな温もりを想うのだ。

銀賞

「悪い父」 北海道 布目 欣生さん

突然妻が入院することになり、幼い息子と二人暮らしになった。

深夜の帰宅が当たり前だった仕事ぶりも返上し、18時半には職場を出る。保育園へのお迎え後、夕飯の準備。手際が悪くて失敗する。それでも息子はけなげだ。

「おいしいよ」

そう言ってくれる。次に、洗濯、掃除、風呂に歯磨き。布団に入っていつもの絵本。だが電気を消しても息子はなかなか寝付けない。逆にこちらが寝てしまう。気付くと、寝ている息子の頬に涙のあとがあった。寂しいよな。ごめんよ。頭をなでて、リビングに戻る。

皿洗いから再開。次に洗濯物を干す。翌日の用意もする。

気付くと朝。保育園に送ってからは、職場では一秒も無駄にできない。そして18時半。毎日がこの繰り返し。

そのタイミングで息子が発熱。職場にさらに迷惑をかける。だがそれを察したのか息子に「ごめんなさい」と言わせてしまった。悪い父だ。職場も家庭も何もかも中途半端。そんな自分にまた苛立ってしまう。

そんなある日、職場のデスクにメモが置いてあった。

「よかったら食べてね」

冷蔵庫には、おにぎりと肉野菜炒め、それにむいてある伊予かんが入っていた。先輩ママさんからだった。飛んで行って礼を言った。

また別の日には、息子が好きな電車のDVDが入っていた。

「うちの子が小さい頃に見ていた物だよ」

今度は、先輩パパさんからだった。

他にも、多くの方から声をかけていただいた。仕事に厳しい上司からも「今は家庭第一だからな」と言われた。鬼と呼ばれた上司の、優しい一面に胸を打たれた。

同僚たちには、自分が抜けた分の負担がかかっているのに、そんなことを微塵も感じさせないようにしてくださった。心から有難かった。お義母さんの助けもあり、生活に落ち着きをとり戻した頃、妻は退院できた。

あの時受けた優しさを、自分もいつか返したい。そのためにも、家庭第一。寂しさに耐えていた息子も、春からは小学生だ。

銅賞

「エール」 山形県 高橋 文子さん

それは、離婚調停の最中のこと。その時の私は人生の一大事に二人の受験生を抱え、身も心も疲弊していた。私の家は、古い住宅街に十六年前に建てた一軒家。もう十六年も住んでいるのに、古い住宅街では未だにどこか新参者のイメージが拭えないでいた。

そんなある日のこと。滅多に話をしたことがないご近所の年配の女性が私に声をかけた。

「あなた、なんだか最近顔色悪いけど大丈夫？」私は彼女の優しい声に気が緩んだのか、思わず涙を零してしまった。よく聞けば、ご近所ではここ数ヶ月夫の車が家に帰って来ていないことが噂になっていたらしい。離婚のことを今まで誰にも話せないでいた私は、堰を切ったように彼女に全てを打ち明けた。

「それは大変。でも、そんなことで負けちゃダメよ。あなたには守らなくちゃならない大事な子供達がいるんだから。母は強しよ！」

彼女が皆に声をかけてくれたのだろう。その日を境に、ご近所の女性達がなにかと私に声をかけてくれるようになった。そして繰り広げられる、知られざる彼女達なりの波乱万丈人生の苦勞話。人生の先輩であり、妻であり母である彼女達の話に「苦しいのは私だけじゃない」そう思えることで、私の心は救われた。そして、頻繁にいろいろなお裾分けが我が家に届くようになった。手料理やお漬物、庭に咲く花や、キュウリ三本、トマト二個の時もある。とにかく我が家の玄関先で、皆たわいも無い話をして帰る。「頑張れよ、負けるなよ」直接そんな言葉はないけれど、充分に私の心に伝わる彼女達の温かい心遣い。

離婚後、私は引っ越すことになりその街を離れた。しかし、今でもなにかあると思いつく。あの街を、彼女達の温かく力強いエールを。そうすると「こんなことでは負けないぞ」そんな気持ちになるのだ。どこに住んでいようとも、あの時ももらったエールは今も私の中で生きる原動力になっている。私はあの時の彼女達の笑顔を一生忘れない。

銅賞

「マスクリレー」 香川県 太田 貴子さん

食料品店のレジに並んでいたときのこと。さっと私の前を走り抜ける女性があり、その女性は私の顔面にぶつかるような形で通り過ぎていきました。

瞬間、マスクが外れてしまいました。

急いでいたのでしょう。女性は一目散に店の奥に走っていきました。マスクは床に落ち、私はおろおろしていました。今のご時世マスクは必需品ですが、このお店にマスクは置いていません。今から会計をするため店員さんと向き合わなければならない、歩いて帰らなくてはいけない。ここから家までノーマスクで道を歩くなんて。私は思わずハンカチを口で覆い、天を仰ぎました。

そのとき、目の前に白いものが差し出されました。

「これ、使い」すぐ後ろに並んでいた女性がマスクを差し出したのです。「いいのですか」と尋ねる間もなく「これ、おニュー」と勢いよく言って女性は笑顔を見せました。

「ほんで、これ、もう一枚」と言って二枚目のマスクを取り出し、私に手渡しました。

私はお礼を言い、一枚でいい旨を伝えると「これは予備。今度だれかがマスク汚したり、忘れていたら、渡してくれるか？」

女性の意図がわかると、なんとステキな、未来につながる気遣いなのだろうかと感動をおぼえました。

「あなたネットでつぶやいたり叫んだりする？」

私は一瞬理解に苦しみましたが、やがてそれがツイッターなど SNS をやっているのか、という意味だと分かりました。

わたしの返事を待たず女性は言いました。「ネットで、ひろめといて。『ハッシュタグ、マスクリレー』や」

出会った人がマスクに困っていたらマスクを差し出す、マスクリレー。誰もが苛立ちがちな世の中であってなんと温かい試みでしょう。

それ以来、私は自らが身につけるのとは別に五枚入りのマスクを持ち歩くようになりました。まだ次の走者は現れず、マスクは鞆の中で出番を待っている状態ですが、そんなやさしさのリレーの二番走者になれることに、大きなよろこびを感じています。